84th

# 新制作

SHINSEISAKU

2021

会報

新制作協会

vol.78

# 第84回新制作展の開催に向けて

84th 2021

## 今年2021年 新制作協会は万難を排して84回展を開催致します。

**84回展委員長　瀬辺佳子**

昨年新制作に関わる全ての方々の安心と安全を考え、やむなく84回展を延期致しました。現在、少しは明るい兆しも見え始めておりますが、まだまだ予断をゆるさない状況だと思います。

新制作では昨年1年の経験を経て《募集、審査、展示》に至る一連の準備を根本から見直し、新制作らしさを失わず安全で活気のある素晴らしい展覧会を催したいと考えました。特に審査は例年と違い密集をさけるための人数制限により審査室に全会員が入ることが出来ません。例えば、「会員から選抜した審査員団を作り少人数で審査を行う」ような方法をとることも検討しましたが、全会員が平等の権利と義務を負うという新制作の理念に反してしまいます。

そこで、絵画部門はおもいきって無審査というアンデパンダン的な考え方を採用し、門戸を大きく広げました。つまり、応募者の作品は全て会場に展示されます。

また　彫刻部門では地方からの出品者も多いため、上京の回数を減らし地方の会員の安全も守るという点で、デジタル審査に踏み切りました。新しい試みにひとりでも多くの方が参加されるよう応募料を無料としました。

スペースデザイン部門は　全ての点で今の状況をクリヤーできるとして安全に十分配慮しつつ例年通りの審査を行うことといたしました。

以上のように3部門とも別々な方法をとりますが、ひとえにこの状況下で取り得る最善策を部門各々の状況にあわせて取り組んだ結果です。

84回展を安心、安全で活気に充ちた素晴らしい展覧会にしたいという気持を共有した結果です。また、84回展会場では　体温計　消毒液を準備致しますと同時に、会場内での密集をさけるための努力をいたします。一年の延期を経て、会員にも応募者の皆さんにも創作のエネルギーが満ち溢れていると思います。

どうぞ、皆様84回展を実りあるものにいたしましょう！

### 第84回新制作展
### “The 84th Shinseisaku Art Exhibition”

84回新制作展は下記の日程を予定しております。

国立新美術館
The National Art Center, Tokyo

2021年
9月15日（水）－9月26日（日）

2021年度委員
〔代表委員会〕
委員長　　瀬辺佳子（彫刻部）
副委員長　金森宰司（絵画部）　尾埜行男（SD部）
代表委員
●絵画部　小野仁良　樺山祐和　鈴木幸子　松木義三
●彫刻部　玉栄広芳　平田義之　松枝源太郎　渡辺尋志
●SD部　五十嵐通代　金子武志　白川隆一　吉田淳子
〔合同委員会〕
●会計委員会　●図録委員会（図録／広告）
●美術館担当委員会
●広報委員会（広報・PR／会報／HP）
●IT委員会　●受賞作家展委員会
●慶弔委員会　●美術団体懇話会

## 各部より

**絵画部　　金森宰司**

ニュースでは、毎日コロナ感染者の人数を伝えられ、困ったなと思いつつ人数が増えれば出かけるのが気になります。コロナ禍で一人一人如何に作家として感じどう考えて作品と関わって伝えようとしているのか、同じ作家として何を考えるのかと思いを巡らしています。

84回展だけ出品者全員の作品を並べます。全員が会員になったつもりで、出品する一点の作品に期待します。

新制作としてはコロナ禍でこんな作品ができるのだということを国立新美術館で世間に知らしめ、新制作の意気込みを作品で伝えてみてほしいものです。

私は身の安全が気がかりで、言い訳しながら、作品だけが余った時間分だけ進んでいます。

私は何かコロナ禍と関わったんだろうか？そのことを思いつつ制作時間が増えたことが言い訳になっていますが、会での私の先輩である佐藤泰生さんが、マスクに絵付けをして作品にするイメージを話しながら、数十のエスキースを見せてくださった。コロナ禍を前向きに捉えることの刺激になった出来事でした。

皆さんはどんな制作しているのでしょう。我々とともにコロナ禍でも魅力的な新制作展を開催しましょう。お互い力作を！

**彫刻部　　渡辺尋志**

この新型感染症禍で新制作彫刻部はなんとか活動を開催してきました。ウエブ展覧会、Web講評会、ギャラリーせいほうでの会員による小作品展など今までなかった活動を手探りで進めてきました。

昨年3月に本展の延期を決定したことから、新制作彫刻部会員のデジタルへの意識を高められたことを感じていますし、このことは、この一年数ヶ月の自粛期間の最大の収穫だと思っています。以前とは違い、電子メールの確認が早くなり返信もスムーズに届きます。コンピューター、スマートフォンを使ったリモート会議の開催が問題なく開催されるようになりました。

そして今年の開催に向けては、まだまだ感染症の終息は難しいと考え作品の審査を作品のデジタル写真提出によるデータ審査に切り替えることとなりました。もちろん会員全員がデジタル化に対応しているわけではありませんのでデジタル環境の用意のない会員にはデータでの配信はせず写真の送付で対応することになります。

応募締切りが例年より1ヶ月ほど早くなり応募者の皆さまは驚かれると思いますが、昨年出品に向けて制作されていた作品の出品も是非お待ちしています。

84回展開催に際し、出品者の皆さま、観覧を楽しみにされている方々、また関係の業者様、今後とも新制作を宜しくお願いいたします。

**スペースデザイン部　　金子武志**

2020年未曾有の事態により様々な活動が一度止まりました。私たちにとって初めての経験、辛い1年でしたが、次のステップのための有効な「間」でもあったと思います。本展こそ無かったものの、ITを利用し多くの関係者、特に地方の方々とも繋がれたことが嬉しかったです。この間メルマガを立ち上げたり、新たな企画展も実施しました。WEBのSD座談会では建築部の歴史やSD部の活動を紹介する機会に恵まれ、改めて「スペースデザイン」とはどんな部門かを見つめる時間にもなりました。COVID19は私たちに惰性系に陥っていた“ものづくり”を一度振り返り、「何故作るのか」「何故表現するのか」「何故美術館に赴くのか」という根源的な意識に立ち返らせてくれた気がします。本年9月には国立新美術館に作品が並びます。時と場を選ばずリモートでアートに出会える時代に、敢えてリアルな場でリアルな作品を展示し、リアルに「触れ合う」ことの意味とは一体何でしょうか。制作する者、公募する者、受け入れる美術館、足を運ぶ鑑賞者…。対話と関係性の中から時間をかけ評価し合い、育み合い…。前回展覧会から丸2年経った我々はどう変化したのか、今度の展覧会を通じてどの様な答えが見いだせるか期待しましょう。

第84回新制作展

# 作品公募についてのお知らせ

**絵画部　　樺山祐和**

新制作協会絵画部ではコロナ禍での開催において慎重に協議を重ねた結果、84回展に限り無審査による作品展示と決定しました。

このような判断に至った要因は、国立新美術館の審査室の人数制限では、審査を行うことが困難であると判断したことが挙げられます。また審査会員を限定した審査も検討されましたが、新制作の精神に基づき困難であるとの結論に達しました。

出品作品数については1点に限らせていただきます。毎年複数点数を精力的に制作し出品されていた方々にとっては残念なことですが、無審査による展示という現状を鑑み何卒ご理解いただきたいと思います。

無審査という前例のない大きな決断をいたしましたが、このような状況であるからこそ、私たちは、創作すること、作品を表に現すことを、より積極的に行い、社会に問いかけてゆかねばならないと考えております。この新たな挑戦が新制作に関わる私たち一人一人に新しい発見をもたらすものと考えております。

出品に際しての詳細は、出品要項またはホームページ等でご確認お願いいたします。

**彫刻部　　玉栄広芳**

2020年延期から、漸く2021年9／15日～9／26日第84回新制作展が開催されます。

期待と不安が交錯しているのは私だけではないと思います。開催中は観覧者が全国から上京されますので、新型ウイルス感染拡大、変異株の増加傾向も懸念される中、先行きが見えないなら万全な備えで開催しなければなりません。

今年度に限り三部の対応策が取られ、絵画部は無審査、彫刻部はデータ画像審査、SD部は3密を避けて通常に近い審査。新制作協会創立以来初めての出来事となります。

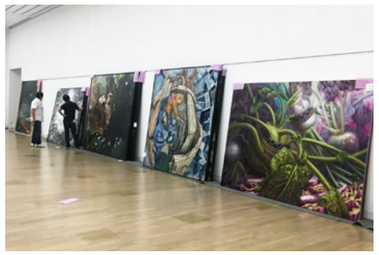
昨年延期が決定された3月、小生は既に出品予定の一作目が完成近い頃でした。あの時から会員及び一般出品者の作品が展示会場に百花繚乱、一堂に会する日をこれほど切望した事はありません。そして、一年数ヶ月延びた為に、更に制作と向き合う時間に恵まれ今まで見えてなかったものが何か明るい兆しのような覚えを感じ得た事は幸いです。

同様に、時間的猶予の中で制作に取り組んだ作家の皆さんも大なり小なりの収穫を得たのではないかと思います。振り返ると2019年度第83回展彫刻部の搬入者、搬入点数共に大幅な減少がありましたが、今年は延期年の作品と合わせてご応募いただければ出品点数の増加に繋がるのではと前向きに考えています。

**スペースデザイン部　　白川隆一**

3月22日に今年1月から続く東京都の緊急事態宣言が解除されましたが、その前日東京オリンピックの海外客の受け入れを断念したとの情報も入ってきました。SD部では全国の会員とZoom会議で話し合いを重ね「作品の公募・搬入・審査・陳列・撤去・搬出」について検討をいたしました。国立新美術館では、新型コロナウイルス感染拡大防止対策として、3密状態を避けるため、搬入時に使用する部屋や、審査室の入室可能人数の上限を定めています。

その結果、SD部としては感染防止対策を十分行いながら、例年に近い形で一連の展覧会開催が可能であるとの判断をいたしました。半年先の状況が見えない中の判断ではありますが、これまで同様の条件で作品を公募し、あらゆる手段を駆使してSD部会員全員による審査を目指す次第です。作品を制作する上でも、コロナ禍で色々な制約もありますが、この混沌とした現代で作品を制作し社会に発表する場として今年の新制作展があります。



# *2020—2021* 各部活動報告

## 絵画部

### 私たちの挑戦　2020絵画部WEB展覧会

絵画部代表委員　樺山祐和

2020年は本当に大変な年でした。コロナウイルスの厄災は社会全体に及び、私たち新制作協会絵画部もその影響を大きく受けました。展覧会延期、中止は1945年、終戦の年以来の事です。そんな状況の中、なんとか出品者の皆さんに発表の場を作りたいという思いが「2020絵画部WEB展覧会」となって開催されました。ファインアートを志す者ならば、作品を自らの目で直接見ずして、その本当を感得することなどできない事は、誰しも理解しているでしょう。画集や画像では表層的な情報は得られても作者の深い思いや新鮮な感覚は伝えられません。しかし、それでも描いた作品を画像データで集め、それをバーチャルな展覧会場において展示する。皆さんの作品は画像でしたが、それらが集まることによってお互いの今が見えてくる。私たちの想像する力で見ることのできないものを補い、実際の絵を感じることができる。否応なく突きつけられたこの環境は、見るという当たり前の自明の事を改めて考えさせる事になりました。当たり前のように制作し展示することが特別なことになった。それは私たち創造する者にとって貴重な体験となるでしょう。本物の作品を見ることができなくても想像することは新しい気づきをもたらすでしょう。全ての出来事が創造することに繋がっていること考えれば、この状況を乗り越えて行けるはずです。絵画部WEB展覧会はこの厄災を乗り越えてゆこうとする新制作に集う私たちの挑戦でした。

絵画部WEB展覧会受賞者作品

奥田善章

下倉剛史

丸尾宏一

神田恭子

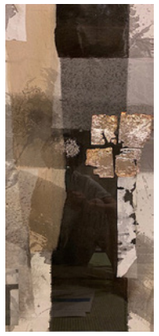
田中直子

渡邊啓子

藤田憲一

八重樫眞一

妹背百代


脇本イサヲ

### 2020年絵画部WEB展覧会：ギャラリートークの報告

絵画部会員　竹内　一

絵画部の各行事は「自らアートや新制作を知り、深めていく」事を目的としています。それを締め括るのが、個々の作品に焦点を当てた「ギャラリートーク」です。

例年は希望される方々の作品について出品者と会員で述べ合う機会としていますが、ZOOMで行うため、ご希望にお応えするのは難しく、あらかじめご質問をお寄せ頂き、それを［1制作上の留意点・2現代社会（コロナ禍）における制作・3主題と技法］の三つに分類し、抽出し作品やご意見をお伺いしながら担当会員が質問内容についてヒントとなる事を述べる形式を取りました。

勿論、絞り込んでの実施でしたので、答える会員も個々に対して述べる形のみならず、質問に関する一般的な考えや方向性を述べるようにしていました。そのため、作品に対する講評的な要素よりも、アーティストトークのようなアートとしての考えを述べ伝える場に近いものとなったかもしれません。話も盛り上がり、予定時刻を1時間ほどオーバーして終了しました。個々の作品について講評するのも有意義ですが、このようなテーマを設定し話し合いを深めるのもアートを知るという意味において良い機会であったのではないかと考えています。

## 新制作絵画部レクチャー対談の報告　絵画部会員　木嶋正吾

対談の主旨は、絵画部会員で100才を迎えた荒井茂雄先生と創立会員の作品を鑑賞しながら創立の思いを見つめ直すことでした。全体の流れとして、前半は新制作アーカイブスヴァーチャル美術館を見ながら創立会員について、後半は新制作への質問に応えていただき、最後に先生の著書の話をしていただきました。収録は、2020年9月1日に先生のアトリエで、新型コロナ感染予防のためマスクを着用して行いました。Q「なぜ第1回新制作展から創立会員は大きな作品を出品したのでしょうか?」という質問にはA「官展の小さな作品とは違った大きな作品で自由な新しい世界を表現したかったのでしょう」。Q「なぜ第1回新制作展の巻頭言などに時代を超越した言葉や新しい考えが並んでいるのでしょうか?」にはA「内容が新しく前向きな生きた言葉だから今も色あせないのです」。Q「今後の新制作展にどんな事を期待しますか?」にはA「お互いを生かしあって個性を大事にした会であってほしい」とお話されました。貴重なお話を解り安く丁寧にしていただき、先生の熱い思いも伝わりました。コロナ禍という困難な中、快く対談をお引き受けいただいた荒井先生とご家族の皆様に心から感謝申し上げます。

2020 絵画部WEB展覧会　バーチャル美術館会場

# 彫刻部

## 新制作協会彫刻部 小品展　彫刻部会員　本田悦久

2021年2月1日（月）～2月12日（金）
ギャラリーせいほう

ギャラリーせいほうさんは窓が大きく自然光と白い壁がとても気持ち良いギャラリーです。素材は石、木、テラコッタ、陶、ブロンズ、鉄、ステンレス、石膏、乾漆…。多彩です。

気軽に、身近に作品の持つ世界に触れ合うことができました。作品のてっぺんが見えて全体が視野に入るのも新鮮な楽しさでした。（新制作協会メールマガジンvol.7♪彫刻部小作品展に行ってきました♪より）

「モノクロームの展描」人通りの少なくなった銀座。その風景はなぜかモノクロームに感じた。いや、少しセピア色だったかもしれない。

## WEB展描

2020年10月10日（土）～2021年1月10日（日）

本展延期の時期に少しでも彫刻部としての活動は出来ないものかという考えのもと、会員と一般出品者の皆様とのいつもとは違った形での作品発表をすることとなりました。一般的に写真で彫刻を表現するのは大変に難しいと言われております。何が難しいか…。視覚、触覚、嗅覚、聴覚…の仕事である彫刻は目の前に存在したときから作品になりますが、画像になったときその感覚は消えるからだと思います。

よって、今回はその感覚を狙っての展示ではありません。新制作展に関わる作家の紹介と捉えていただきたいと思います。

延期になったこの時期に作品造りに対して前向きになる作家たちの作品を見て欲しいと思います。
そして今年の第84回展で、気になる作家の本物の立体作品に出会っていただきたいと思っております。

# スペースデザイン部

## スペースデザイン部企画展
## 「ちょっと小さなスペースデザイン展」
## SQUARE 45

SD部会員　吉田淳子

2021年3月8日（月）～13日（土）建築会館ギャラリーに於いて、会員28名、協友10名による“SQUARE 45”をキーワードにした企画展を開催しました。45cm$^3$以内というサイズを制作の共通条件としてそれぞれの技法・素材で制作、床置きと展示台のみで会場を構成しました。昨年本展はできませんでしたが、協友の方々と作品展示ができたことはとても嬉しく思います。6日間多くの方にも来場いただき様々な評価をいただくことができました。作品はSD部のHPで紹介されています。
SD部HP→ https://shinseisaku-sd.jimdosite.com/

### SD通信

昨年9月から「SD通信」がスタートしました。20日に1回のペースで配信のスペースデザイン部情報メールマガジンです。現在会員によるコラム「私を創ってくれた3つの作品」を特集しています。バックナンバーはSD部HPでご覧ください。

配信希望の方はこちらのアドレスへ
→shinseisaku.sd1969@gmail.com

## 創立期の展覧会風景

当時の会場（旧東京都美術館）

絵画部　第16回展（1952年）

彫刻部　第19回展（1955年）

建築部（現：スペースデザイン部）　第19回展（1955年）

## 地方展開催案内

**第84回新制作　京都展**
京都京セラ美術館
10月26日（火）～31日（日）

**第84回　新制作絵画展　名古屋**
愛知県美術館ギャラリー8階
11月16日（火）～21日（日）

## 訃報（2021年5月現在）

新制作協会発展に尽力されました故人を偲び、心よりご冥福お祈り申し上げます。

糸田玲子 氏　絵画部会員
2020年10月27日逝去（享年96歳）
鶴見雅夫 氏　絵画部会員
2021年1月31日逝去（享年85歳）
福島誠 氏　絵画部会員
2020年12月12日逝去（享年89歳）
照井榮 氏　彫刻部会員
2020年11月8日逝去（享年88歳）
小野かおる 氏　スペースデザイン部会員
2020年10月13日逝去（享年90歳）
山下勘太郎 氏　スペースデザイン部会員
2020年12月22日逝去（享年79歳）

## 表紙作品

### 岡崎 紀 《ある風景》

2009年
194cm×324cm
（東広島市立美術館蔵）

新型コロナウイルスの感染拡大で、大変な世の中になりました。幸か不幸か自由になる時間が増え、自分を見つめなおし、充実した仕事ができました。

人間の内面的なものを表現したく造形して来ましたが、最近は自然の雄大さや、生命力、光と風など人間のたちうちできないような大きなものを感じながら造形化しようとしています。

郷土、東広島市（広島県）に新しい美術館が完成し、「眼でふれる―5つのまなざし」展に彫刻部の会員、ゼロ・ヒガシダさんと一緒に出品、私の作品11点が展示されました。（会期2021.2.16～3.28まで）郷土は良いもので、多くの人々と親交を深め楽しんでまいりました。

新制作も会を重ね創立会員の皆様を身近に知る最後の世代となりつつあります。展覧会、会議等、時には一緒にゴルフ等を楽しみ、親交の中から自分に厳しく、他人に優しい人達が多いのを知りました。「藤島武二と新制作初期会員たち」展（神戸市立小磯記念美術館・川越市立美術館）で大きな作品にみなぎるエネルギーには、深く感銘いたしました。これからも皆で力を合せ、ますますの新制作発展を願うものです。

岡崎 紀

《階段のある風景》1987年 194cm×162cm

新制作協会事務所
〒160-0022
東京都新宿区新宿6丁目28番10号
大阪屋ビル202号
TEL：03-6233-7008
FAX：03-6233-7009
Mail: webmaster@shinseisaku.net
www.shinseisaku.net

発行　新制作協会
発行日　2021年5月
監修　瀬辺佳子
企画・編集・制作　広報委員会広報誌編集委員
　小島隆三、山口都、本田悦久、藤森民雄、二井進、雨山智子
デザイン　SHIMA ART&DESIGN STUDIO

## 編集後記

昨年は新型コロナウイルス感染拡大のため本展は開催されず、各部それぞれ工夫して作品発表の場を設けました。こんな時こそアートの役割が試されるのではないでしょうか。今年はコロナ禍の中、例年とは違った形の展覧会開催に向けて準備をしております。広報冊子の「新制作手帖」も発行を予定しております。

今号に原稿をお寄せくださった方、ご協力いただいた皆様に深く感謝申し上げます。（小島）